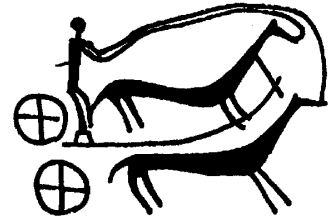


センターニュース

Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター

Newsletter No.20



農学部附属牧場での第2回フレッシュマン教育	3
教養教育に関する全学シンポ開催される	4
札幌市のリカレント講座始まる	5
北海道大学教育ワークショップの案内	6

巻頭言

FOREWORD

全学教育の課題

法学部教授・法学部長 中村 研一

全学教育には、学生からも教官からも多くの苦情が寄せられる。時には教官の口から「全学教育の危機」という言葉が飛び出すほどだ。ただしひとことで「全学教育」と言っても、ここには異なる問題群が混在している。それだけに万能の解決策はない。

第一は、学生側の動機付けの空白。「高校の先生は期待してくれた。予備校の先生は熱心だった。大学の先生はその両方がない」と新入生が言う。この言葉は一面で、大学の初年次教育の冷たさ（後述）を

突いている。しかし他面で受験時代は、「期待」と「激励」という外からの力で勉強し、受け身のまま大学に入り、心の内に学ぶ情熱が欠けていることを物語る。要するに、大学一年生は高校と同じように客体として教育をされたがっていない。

また新入生には「全学教育は学ぶ理由が不明」ということがある。ただしその場合、クラスのような枠組を持たず、地理不案内な教室間をただ浮遊する不安感を指すことが多い。また「理由不明」とされる科目は、全学教育の全部ではない。例えば理系学生が人文社会科目を学ぶ、あるいはその反対のようなケースが多い。（第二外国語も顕著。）

ここには電子工学の志望者が、その基礎として物

理を学ぶような明確な動機付けはない。また関連諸科目を、累積的に深めていく面白さも感じられない。学生の視点からすれば、これらの科目に意欲を感じられないことには、明確な根拠があるのだ。専門、あるいは専門基礎のように学ぶ動機付けが自明でない分、全学教育科目では学ぶ理由を学生たちが自分の心の内側で探し出す時間が必要なのだ。

第二に、全学教育に対する教官側の位置付けが低い場合がある。「大学院教育など忙しくなる一方で、全学教育に労力を集中するのは、機会費用が高すぎて辛い」と同僚が言う。この言葉は、今の大多数の北大人にとって率直な本音だろう。なぜなら大学のシステムが、研究及び専門教育に比べ、全学教育に低い価値しか与えていないことの反映だからだ。

これが教育姿勢に現われると、一年生たちは冷たさを感じ取る。「自分たちに対する教育は周辺の二義的な価値しか与えられていない」という疎外感を鋭く感じるのだ。もちろんそれは教官個人の冷たさであるより「初年次教育は低く見られている」というシステム序列の冷たさだ。重要でないと思いながら教え、軽視されていると感じながら学ぶ、という教育では、その効果が大幅に減殺されてしまう。これは教育者が自分の教育に唾する深刻な自己矛盾だ。

その反面として、第三に「教養教育」への過剰な位置付け・期待も見られる。オウム真理教事件を契機に、大学における専門分化の過剰な進展、実用主義の強調、物質的価値の肥大化が反省された。その対抗極となる教育の必要性は明らかだ。しかし、これは大学教育の根本課題であって、それを克服する役割を、教養主義や教養教育のみに期待するのは無理があるのではないか。

そもそも大正期の思潮としての教養主義は定着しなかった。それを大学に根付かせる条件（保障された自由と寮生活）も消滅した。さらに西欧語を習得

し西欧文明を継承する、という学習の前提にあった文明間の序列も相対化した。この教養の風化という土台の消滅によって、リベラル・アーツ系科目と第二外国語を学ぶ動機付けは、宙釣り状態にある。ただでさえ苦戦している既存のアーツ系教育のみに、専門化・実用化・物質化に対抗するという重い役割を負わせるのは酷だ。

むしろ学生の動機付けが比較的容易な専門基礎という枠内で専門を究めた先生が専門化や実用主義の批判（自己批判）を展開し、リベラル・アーツ系科目や非専門科目の履修を奨めることが、効果的だろう。たとえば医学部の学生にとって本当に「医の倫理」を考えさせることが必要だと判断するなら、その種の科目の展開を文学部に依頼し、それを医学部が履修させるといった方式の導入が必要だと思われる。

第四に全学教育には制度的ハンディがある。多くの教官が全学教育の仕組みに慣れていない。教官は、何の了解事項もないまま流動する学生と偶然に教室で遭遇する。しかも試験が終わればほぼ二度と出会わない。自分の教育の成果を刈り取る機会のない<一期一会>的出会いだ。教官の間に「これではカルチャーセンターだ」という印象が生まれている。加えて全学教育に責任を負う教官組織がなく、教育を自己反省するための仲間（引照集団）、改善策を議論する機会を見つけるのが難しい。

その他方で運営を担う一部教官は、負担が集中し「蟻地獄」的状态になっている。これらが重なり合って、教官の負担感と徒労感の原因となっている。その克服には、全学教育の制度改革が不可欠であろう。

この巻頭言は9月22日に学術交流会館で行われた「教養教育に関する全学シンポジウム」における発言をもとにつくられたものです

農学部附属牧場での第2回フレッシュマン教育

農学部附属牧場助教授 秦 寛

農学部附属牧場では、「自然に働きかけて生物生産を行う農業（畜産業）を通じて自然と人間との関係について理解を深めること」を目的として、昨年度に引き続き、フレッシュマン教育を9月21日～25日にかけて4泊5日で実施した。

今回も募集定員を上まわる34名の応募があり、調整の結果最終的に8学部（文，経，理，工，農，水，薬，獣）から23名（男10，女13）が参加した。これらの学生の指導には、牧場スタッフ9名（教官1・技官8）に加えて、農学研究科（家畜生産学講座・地球環境学講座）、附属施設（植物園・演習林・農場）および高等教育機能開発総合センターから7名の教官が当たり、大学院生2名（M2・M1）にも協力を願った。

初日にグループ学習の仕方を習った後、2日目からは厩舎・牛舎作業，牛・馬体測定，放牧地観察，乗馬など家畜生産に関係した研修や，土壌観察，森林観察，林床植物視察など牧場での家畜生産を取り巻く自然に関する研修を受けた。さらに

グループ学習では，昼間の研修に関連したテーマについて，連日熱心な討論が行われた。

この冬には農学部附属演習林でも2回目のフレッシュマン教育を実施することになっているが，「このような北大らしい附属施設を使った自然教育をもっと多くの学生が受講できるようにしてほしい」という声に参加した学生の中から多数であり，他の附属施設でもこのような取り組みをしていただけると幸いである。

教養教育に関する全学シンポ開催される 総長はじめほとんどの部局長が参加

生涯学習計画研究部 小林 甫

さる9月22日、おりからの雨の中、学术交流会館を会場に、「教養教育に関する全学シンポジウム」が開かれました。午前中に80人前後、午後は60人前後の関係者が集まり、活発な討論がなされました。司会挨拶（阿部・高等教育開発研究部長、山口・全学教育委員会小委員会委員長）、中村センター長の開会の辞のあと、昨年度総長経費の「高等教育の改善」に関わる4つの研究報告が行われました。それぞれに興味深いものでしたが、「付属施設を活用した『自然・農業と人間』に関する教養教育（フレッシュマン教育）の試み」（農学部附属牧場・附属演習林と高等教育開発研究部）は多くの共感を得ていました。また、生涯学習計画研究部の「職業人のリカレント学習を通して見た全学教育改革 工学部卒業生の郵送調査から」には、早い段階での結果の公表が求められました。

メインの「学部一貫教育体制における教養教育」では、小林・生涯学習計画研究部長の学部一年生に対する「教養教育」（“人間教育”＋“基礎再教育”＝「自己教育」）の必要性、人間的・知的成熟への動機づけ、青年期の“自分さがし”

の一環でもある転部、休・退学への対応、リメディアル教育の位置づけ等の報告のあと、中村法学部長、井上医学部長、福迫工学部長、生越農学部部長、三本木理学部長、北原文学部長、浪田言語文化部長の指定発言がありました。丹保総長の「基調講演」は、「現代の教養」を、近代の閉塞、近代ヒューマニズムの限界を経て後近代へと展開し、共生のエコロジーの相克を解きほぐすために「必要な素養」、「人間の学」を内在させる「地球環境学的素養」でないかと強調されました。

討論では、前出獣医学部長、内田経済学部長、新妻元教養部長、長澤薬学部長、鈴木水産学部教授、木谷工学部教授、逸見教育学部教授など、多数の参加者から多様な意見が寄せられました。

「まとめ」において中村センター長は、教養部の崩壊＝教養教育の解体という全国的理解の中で、北大は「まだいい」状況にあるが、カリキュラムの彫琢や、責任部局制の拡充、教官と事務の連携の促進など、一層の努力をしようと要請されました。なお、この集会の発言などは記録集として出すことになっています。

札幌市のリカレント講座始まる

札幌市におけるリカレント教育の学習機会の充実を目指して、大学間のネットワークをつくり、学習コースを企画・実施しながら、リカレント教育の体制や新しい「市民大学」のあり方が、札幌市リカレント教育研究会（委員長：小林甫生涯学習計画研究部長，生涯学習計画研究部の全専任教員がメンバーになっている）で検討されています。

札幌市生涯学習総合センターの建設が西区宮の沢ではじまり、リカレント教育を中心とする高等教育機関ネットワーク型の「市民大学」の開設も検討されています。そのための、実験的なプレ講座が、今年度は10以上、研究会と札幌市教育委員会の共催で実施される運びとなっており、まず、札幌商工会議所が中心となって開設される「創業塾」（11月13日～12月18日，16回），北海学園大学，教育大岩見沢校による「環境問題を考える」（10月22日～11月26日，13回），札幌市立高等専門

学校による「楽しい現代美術講座」（11月4日～11月28日，11回）の受講生募集・実施が始まっています。

今後、北星学園大学による介護保険をテーマにした講座や生涯学習計画研究部が中心に企画される（1）地域の産業発展と人材養成，（2）ボランティアをテーマにした講座が準備されています。

なお、生涯学習計画研究部主催の生涯学習計画セミナーが9月4日～18日に6回にわたり開かれました（札幌市教育委員会，札幌市リカレント教育委員会の後援）。今回の講座は、大学と自治体の生涯学習との連携をすすめるコーディネーターの養成を目指すもので、本学の生涯学習掛のほか、北海道医療大学，北海道女子大学，北海道教育委員会，札幌市教育委員会，岩見沢市，石狩市，月形町，長沼町各教育委員会，札幌市青少年婦人活動協会等からの受講者があり、盛況のうちに日程を終えました。

高等教育

HIGHER EDUCATION

北海道大学教育ワークショップ 「21世紀における北海道大学の教育像をめざして」

医学部教授・高等教育開発研究部長 阿部 和厚

かねてからご案内のように、北大では、きたる11月27日(金)から28日(土)に「21世紀における北海道大学の教育像をめざして」と題する教育ワークショップを行います。総長のリーダーシップのもとに、高等教育開発研究部の主催で実施し、北大のファカルティ・デベロップメント(FD)の一環となります。

教育に関する教員研修の必要性は、北大の点検評価が平成4年に始まって以来、毎年、いわれてきたことです。平成9年度の点検評価「学業成績評価について」においても、シラバスの在り方の検討と合意形成、成績評価基準の明確化・公開の措置、教育業績評価の必要性があげられ、これらの問題解決のために、北大の教育に対する共通認識をもつFDの具体化が待たれていました。

研修場所は、真駒内の北海道青少年会館(札幌冬期オリンピックの選手村)で1泊2日のコースとなります。各学部から2~4名の教官、合計40名の参加で実施します。40名と人数を限定する理由は、ワークショップという研修形式によります。40名は5グループに分けられ、各々課題について1時間程度のグループ作業を行い、ついで全体発表討論となります。5グループの発表ですから、さらに1時間は必要となります。ワークショップでは、課題の理解のためのミニレクチャー、課題解決のグループ作業、全体討論をくりかえして、各参加者は忙しく作業し、最後には、全員の力で、教育に関するかなりの量の成果を自らのものにしたことに気がきます。ここでは、多様な資質の人物が集まって互いに建設的な意見交換することで、よ

り生産的な成果を得ることが期待されます。

また、この研修自体が、グループ学習形式であり、学生参加型授業を体験することになります。

高等教育開発研究部の教官は、ワークショップ進行のデザイン、ミニレクチャー、グループ作業の陰の支援をします。このような役割をタスクフォースといいます。ワークショップの内容を右ページの表1に紹介します。

表1の作業目標で示したように、各教官は、大学の教育改善に資する具体的方略を身につけます。これにより北大の21世紀の教育の在り方を明確にします。

また、進行(案)における*印のものは参加者が中心です。グループ作業、発表討論が大部分です。時間内に課題をまとめ、発表討論をし、必ず記録を提出します。時間がたりないほどの密度の濃い研修となりますが、それだけ得るものも大きいと思います。また、いろいろな学部の方々と真剣な議論を交わし、互いに知り合えることが大きな収穫となります。普段着でリラックスして参加し、作業、討論に集中します。北大の将来を決めるような成果もあると思います。

このように、この研修は、講演会型のFDとは本質的に異なります。参加者が中心で、互いに鏡映しながら、体験的に学び参加者各自が大きな成果をものにしていきます。そして、これを各学部の教育改革で生かしていただきたいのです。

画期的な会となることを期待します。なお、参加者の人数には制限がありますが、参観は自由です。よろしくお願いします。

表1. ワークショップの内容

プロデューサー 丹保憲仁
 ディレクター 阿部和厚
 タスクフォース 阿部和厚, 大滝純司, 小笠原正明, 西森敏之, 細川敏幸, 木村 純

作業目標

- 1) 大学という教育機関における教育の在り方の基本を理解します。
- 3) シラバス表現の基本を身につけます。
- 4) 授業設計の基本を身につけます。
- 5) 目標設定と成績評価基準について理解します。
- 6) 学生中心授業を体得します。

進行(案)

27日(金)	28日(土)
<p><午前> 北大からバスで出発・バスで研修を開始 北海道青少年会館到着 総長 開始挨拶 カリキュラム・シラバス理解 * 教育へのニーズの解析 (目標設定へ向けて)</p> <p><午後> 学習目標の分類と表現 * 目標に応じた授業法 学生参加型授業の理解</p> <p><夕食後> * ディベート体験 * 懇談会</p>	<p><午前> 近代の大学教育 目標と評価の規準 * 授業設計 目標の設定と表現</p> <p><午後> * 授業設計 授業内容の設計と成績評価 修了式 帰学</p>

センター日誌

CENTER EVENTS, Aug. - Sep.

8月

- 12日 ・生涯学習フォーラム
 20～21日 ・(会議)第27回東北・北海道地区国立大学
 教養教育実施組織事務協議会(於:山形大)
 25日 ・「センタ-ニュース」第19号発行

9月

- 2日 ・(会議)第7回教務事務システム専門委員会
 9日 ・(会議)センタ-長・部長会議
 11～12日 ・国立七大学共通教育主幹部局事務協議会
 (於:東北大)
 18日 ・(会議)大学院委員会
 ・(会議)第34回センタ-連絡会議
 ・(会議)第21回全学教育委員会
 22日 ・教養教育改革に関する全学シンポジウム
 25日 ・(会議)公開講座講師打合せ会
 30日 ・学位記授与式(博士)

行事予定

SCHEDULE, Oct. - Mar.

	【日(曜日)】	【行事】	【備考】
10月	1(木) 15(木)～16(金) 15(木)～16(金)	第2学期授業開始 1年次履修届受付 2年次以上履修届受付	当該学部
11月			
12月	24(木)～1月8(金)	冬季休業日	
1月	11(木)～13(水) 16(土)～17(日) 18(月)	補講日 大学入試センター試験 授業再開	
2月	5(金) 8(月)～19(金) 23(火)正午 22(月)・23(火) 25(木)	第2学期授業終了 定期試験 定期試験成績提出締切 追試験	
3月	1(月)正午 12(金) 中旬～下旬	北海道大学第2次試験(前期日程)【予定】 追試験成績提出締切 北海道大学第2次試験(後期日程)【予定】 学科等分属手続	当該学部

編集後記

9月22日に「教養教育に関する全学シンポジウム」が開かれ、本号の巻頭言のような中村法学部長の発言など活発な討論が行われ、また、11月27、28日には「21世紀における北海道大学の教育像をめざして」というワークショップが計画されています。北大の教育の問題点について理解が深まり、改革への道が見えてくると期待されます。農学部附属牧場でのフレッシュマン教育などでは学生は生き生きとしています。このように、学生を触発する教育が望まれます。(羽)

センターニュース 第20号

(北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌)

発行日: 1998年10月29日

発行元: 北海道大学高等教育機能開発総合センター

〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目

電話 (011)716-2111 ・ FAX (011)706-7854

編集委員: 小笠原正明・西森敏之・細川敏幸・

町井輝久・山口佳三

ご意見、お問い合わせは 印の編集委員まで

電話: (011)706-2194; FAX (011)706-4922

インターネット ホームページ: <http://infosys.academic.hokudai.ac.jp/center>